

筑波大学附属図書館における電子展示のありかた

大久保明美

●はじめに

筑波大学附属図書館（以下「当館」という。）では、1995年の中央図書館新館貴重書展示室オープンを機に毎年展示会を開催し、これまで開催された特別展・企画展は31回を数える。本稿では、2015年以降の当館における展示会の状況やコロナ禍において実施した電子展示の取り組みを中心に紹介する。

●展示会の歴史

当館の展示は、貴重書展示室において通年展示されている「常設展」と、毎年学園祭の時期をばさんで開催される「特別展・企画展」に分けられる。いずれの展示も大学図書館が所蔵する貴重資料を広く公開することを目的として開催している。「特別展・企画展」は、固有のテーマで開催される現物展示、それを補足する展示図録の作成と電子展示の公開を基本のスタイルとしている。なお、現物展示と展示図録については、長年同様のスタイルで継続されてきたが、電子展示については展示資料の紹介にとどまらず新たな情報を付加して公開することを目指し、毎年創意工夫を凝らしている。

●電子展示の取り組み

当館では、1995年の展示会開催当初からすべての展示会においてオフィシャルWebサイトを構築してきたが、当初は展示概要と所蔵資料情報がリンクされた展示目録を主としていた。しかし1998年に始まった「筑波大学電子図書館」によって、大きな転換を迎えることになる。筑波大学電子図書館の基本理念は、“本学で収集・生産・蓄積された学術的価値の高い資料の原文を電子化し、全世界に向けて発信していく”とされている。この理念のもと、当館が所蔵する貴重書のフルカラー高精細画像の作成や過去に作成されたマイクロフィルムからのPDF作成をすすめ、その電子画像（全文）が図書館のWebサイトから閲覧できるようになった。展示のオフィシャルWebサイトにおいて

も展示図録をPDF化して公開し、さらに所蔵資料情報からの電子画像をリンクすることで資料全文をWeb上で閲覧できるようになった。その後も「企画展・特別展」のWebサイトは、電子展示を中心に各展示会によってさまざまな工夫をしており、SNSの普及に伴い2009年からはYouTubeでの講演会録画配信、2010年からはTwitterでの広報も開始している。なお、電子展示による画像公開、展示図録PDF、講演会動画配信等を含む基本的なWebサイト構成は現在も続いている。

●2015年以降の特別展開催

2014年までは展示の企画内容に関するさまざまなトピックは主にオフィシャルWebサイト内のブログで公開してきた。しかし当該ブログウェアのサポート終了に伴い、2015年以降はWebサイトのコンテンツ充実に加え、展示室で実際に体験できる電子展示について模索を始めた。「数学の叡智」(2015)の際には、展示室内のパソコン上に作図器を展示し来館者が実際に操作できるようにし、「江戸の遊び心」(2017)の際には、本学教員が開発した「浮世絵鑑賞システム」を利用して源氏絵から読み解く平安時代の暮らしをWeb画面上で体験することができるようにした。「狩野探幽の屏風絵」(2019)では、修復完成公開記念として特別公開された屏風現物に加え、修復前、修復後の画像を大型ディスプレイに映し、現代の古美術修復技術の高さを鑑賞できるように工夫している。また同年秋の「東京1964と日本文化について考える」(2019)では、1940年のオリンピック誘致の際に作成した豪華写真集『日本』の高精細画像を作成し、大型ディスプレイにてページ送りを自動再生して約80年前の日本文化の美しさを紹介し好評を博した。Webサイトからの電子展示による画像公開は現物展示を補完するものであるが、大型ディスプレイを利用した電子展示は、展示会そのものに付加価値をつけるものとして一定の成果が得られたと思われる。

●2020年電子展示

当館の展示会は、毎年さまざまなテーマで開催し好評を博してきたが、2020年は新型コロナウイルスの影響により図書館利用の制限が続く、その開催が危ぶまれた。しかし当館では、コロナ禍で大多数の機関が中止せざるを得ない状況の中、当該事業を継続してきた意義を鑑み、例年のような構成での展示にこだわらず、電子展示のみで特別展を開催することとした。「もう一度見たい名品～蔵出し一挙公開～」は本学の25年に及ぶ展示会を振り返る2部構成とした。2004～2019年の15年間の各展示から、企画担当教員の協力を得て選りすぐりの資料を数点ずつ選び「もう一度見たい名品」として紹介するとともに、1995年以降に開催された展示会の振り返りは「特別展・企画展の軌跡」として紹介した。

「もう一度見たい名品」では、各展示の概要にポスター画像を配置し、資料解説からは高精細画像による資料を公開し、それぞれのサムネイルからは拡大された画像が表示されるようにしている。また、「特別展・企画展の軌跡」では、過去の展示会オフィシャルWebサイトの見直しを行い、開催当時の形はそのままに資料リストや各リンクを整備して最新の書誌情報や電子画像へのアクセスを可能にした。開催中には、Twitterを利用してポスターに使用した資料を中心に紹介するなど、電子展示をより楽しんでもらえるような工夫もしている。なお、電子展示のみで展示会を開催するのは初めての試みだったため、Webサイト公開に先立ち、館内でPR用に貴重資料を図柄としたしおりを配布し周知を図った。会期中Webサイトへのアクセス数は、現物展示を伴う過去のWebサイトへのアクセス数と比較すると約1.4倍であり、展示会開催という一定の成果は達成できたと思われる。また、過去のWebサイトを見直すことによって、展示会が歩んできた歴史を知り、さまざまな内容で毎年展示会を開催してきた先人たちの努力と挑戦に敬意を払うとともに、展示会の継続に尽力しなければならないと痛感した。

●コロナ禍での展示

2021年、当館では図書館利用の制限緩和があり、展示会「時を数む」は現物展示を中心とした基本スタイルを踏襲して開催した。学外者の利用制限は継続していたため、学内のみ公開の展示会となり、例年に比べると入館者が少なかったが、オ

フィシャルWebサイトの電子展示や特別展の内容を資料とともに解説した講演動画を充実させるなど、コロナ禍にあっても楽しめる展示会を継続させることができた。

2022年春、学外者の利用制限継続中のため「歴聖大儒像」の修復完成記念の特別公開は学内者限定で行われたが、修復工程について、各工程ごとの詳細な解説と画像を作成し来館者の関心を得ることが出来た。その後、学外者の利用制限緩和があり、秋の特別展「孔子をまつる」は、事前予約制による学外者も観覧が可能となった。事前予約はGoogleフォームのみで受付し、観覧時の注意点を受付完了メールにて送信した。3年ぶりに基本的な展示会のスタイルが復活し、会期中の講演会等も対面で行われたが、来館しなくても楽しめる電子展示の必要性は増加したといっても過言ではない。

●今後の課題

展示会を開催するために、図書館職員8名程度で構成される展示ワーキンググループ（以下「展示WG」という。）の活動は必要不可欠なものとなっている。展示WGでは、企画、ポスター作成、展示図録作成、パネル等作成、Webページ作成、広報等を中心に、各自が複数の業務を担当している。当館の展示会は、貴重な所蔵資料を公開し毎年継続的に開催することを基本として一定のスタイルを確立してきた。しかし、展示WGの活動は、通常業務外となるためその業務量を考慮すると展示会のあり方を検討する時期になったと考えられる。コロナ禍を経験し、現物展示の付加価値として電子展示を試行錯誤したことにより、その可能性はさらに拡大していくと思われる。大学図書館は、貴重な資料を収集し保存して公開する義務を担っている。今後も、当館では現物展示とともに電子展示に新たな付加価値を加え展示会を継続していくつもりである。

参考文献

- ・筑波大学附属図書館特別展・企画展
<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/support/special-exhibition>
- ・大久保明美、篠塚富士男「筑波大学附属図書館における展示活動」図書館雑誌、109(10) 2015.10
- ・大久保明美「筑波大学附属図書館における電子展示」大学の図書館、40(5) 2021.5
(おおくぼ あけみ：筑波大学附属図書館)

[NDC10 : 015.8

BSH : 1. 展示 2. 筑波大学附属図書館 3. 電子資料]